

三菱ガス化学株式会社「2021年度決算説明会」質疑応答要旨

日時 : 2022年5月16日(月) 10:30 ~ 11:30 (WEB説明会)

説明者 : 代表取締役社長／藤井 政志

取締役 常務執行役員 基礎化学品事業部門担当／長岡 成之

常務執行役員 機能化学品事業部門担当／山口 良三

執行役員 財務経理部長／木浦 智之

(本資料に関する注意事項)

本資料については、上記説明会での質疑応答について、加筆・修正を加え、当社の判断で簡潔に纏めたものであることをご了承ください。また、説明会資料同様、記載されている計画、目標等の将来に関する記述は、説明会当日現在において当社が入手している情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいて判断したものであり、不確実性を内包するものです。実際の業績等は、様々な要因によりこうした将来に関する記述とは大きく異なる可能性があります。

Q1: 合成樹脂事業の中期的な戦略について確認したい。ポリアセタール(POM)は順調に拡大している中で、成長戦略をどのように考えているか。ポリカーボネート(PC)は汎用品の業績変動度がかなり高いが、どれぐらいのタイムスパンで、業績変動を抑えながら拡大していくのか。また、PCの派生として、CO2原料のPCの中長期の考え方について教えてほしい。

A1: POMの成長戦略について、5月12日に中国における合弁事業の対外公表を実施した。中国は最大のPOMの市場でもあり、引き続き中国における事業を発展させていく。また、グローバルポリアセタール社に統括機能を持たせる形でスタートを切ったが、結果として、我々のユピタールというブランドに加えて韓国でのケピタールというブランドも手に入れることができた。お互いが持つ得意分野で相乗効果を生み、両者がシナジーの中でさらに世界的、特にアジアにおけるプレゼンスを発展できると確信している。

2点目のPCについて、昨年度は大変厳しい事業環境になった。特に原燃料の価格変動が大きく、価格の高騰に追いつくのは非常に難しかった。原燃料の環境は、現時点ではまた変化しており、特にビスフェノールAを中心とする原料は下落している。こうした事業環境については、的確に当社のポリカーボネート事業の再構築に生かしていきたい。特に汎用品の比率を下げ、高付加価値の製品、特に光学特性に優れたグレードの拡販を進め、並びにもし価格の転嫁が必要であればしっかりと対応しながら、利幅をとっていききたい。タイムスパンについては、今年度は、前年度と比較をすると大きく立て直しを図れると考えている。中国だけではなく、全体に使えるが、高付加価値の拡販を、三菱エンジニアリングプラスチックス社(MEP)の再編の中で可及的速やかに実現していく。CO2原料のPCについては、基礎的な考え方、技術の確立は進めており、これをさらに確かなものにしながら次のステップに入っていければと考えている。

Q2: POMのシナジー効果について、この中計期間中もしくはその後、どの程度期待できるのか。PCの採算改善については、CO2原料で差別化するものが出てくるまで待つ必要があるのか、もっと手前の2年ぐらいのスパンで何らかの業績安定化の手が打たれると期待しているのか。

A2: POMについては、韓国の子会社について連結化が図れることで直接的に利益の取り込みが行える。販売面のシナジーについても、韓国における市場の伸びもしくは価格の利幅の獲得は、今期についても堅調に伸びる方向で考えている。さらに、数年先においては、得意分野のすり合わせから生まれるさらなるプラスアルファが期待できると考えている。

PCについては、CO2原料によるPCはまだ少し先になるかと考えている。そこまで待つわけではなく、規模を追わずに中身を問うていくということの中、今ある能力の中で、汎用品の比率をいかに高機能の方に

スライドできるかを考えていく。具体的には、新たなグレードの開発もしくは必要なグレードの集約が必要と考えており、その中で高付加価値の比率を着実に高めていくことで、数年のスパンの中で達成していきたい。

Q3: 光学樹脂ポリマーについて、昨年度に大幅に落ちてしまったところから今年度はどのような形での回復を見ているのか。また、今年7月頃、光学樹脂ポリマーの増産投資が完了する予定だと思うが、どういった数量貢献、あるいは生産効率や品質の向上が見込めるのか。

A3: 光学樹脂ポリマーは、昨年度の前半で在庫調整は相当調整が図られ、現時点は在庫の調整局面は抜けていると考えている。ただし、半導体不足によるスマホの生産の停滞、制約を受けてしまっている状況にある。今後の展開においても、スマホメーカーやアッセンブリメーカーに必要な半導体をどのように調達していくかが一つの焦点ではあるが、昨年度のような在庫調整はなく、これからまた回復基調に戻っていくと見込んでいる。また、米中摩擦等において勢力地図も変わっていることから、スマホメーカーの実需の動向も探っていく。2点目の増産に関しては、生産設備の手当は順調に進めている。ただし、すぐにフル稼働になることは現在の需給バランスの中ではやや難しく、最も効率の良い形で、実際の需要、受注の状況を見ながら生産のバランスを探っていく。

Q4: 光学樹脂ポリマーでシェア変動や、新規参入の動きはないか。販売価格は維持できているか。

A4: 製品の優位性については現時点、我々が色々な角度で調査をかけて判断している中では、引き続き維持されていると考えている。また、価格の点も、現時点で大きな動きはないと見ている。

Q5: 半導体材料関連について。BT材料の昨年度はかなり高い成長だったと思うが、背景は何か。今年度に関しては少し伸びが鈍化する形かと思うが、要因は何か。また、半導体向け薬液について、北米、韓国の状況を含めて、今後の展開を聞かせて欲しい

A5: BT材料について。昨年度は、半導体はコロナの落ち込みから大きく挽回した。加えて、新たな半導体の用途の拡大も顕著であり、私どものBT材料だけではなく他の材料についても追い風であった。今年度については、昨年度に大きく伸びた汎用品が若干一服する可能性があり、その影響を織り込んでいる。

半導体向け薬液についても、世界的な半導体の生産において、薬品類の需要は非常に顕著な伸びを見せており、今現在も旺盛である。特に北米と韓国における伸びが著しい。今年度も世界的に伸びが見込まれるため、増量要請については的確に応えていく。

Q6: BTに関して今年度伸びを牽引するところは、例えばデータセンター向けのDRAM向け、AiPなども含めて5G関連のコンテンツの増加なのか。新しくPC向けでも採用されていると思うが、タイ新工場の稼働も含めて、今年度の見通しを補足いただきたい。

A6: BT材料は従来のメモリーだけではなく、ロジックにも適用されてきているのでさらに伸ばしていきたい。同じスマホ1台あたりをとってみても、AiPを含めて、当社の材料がより使われる方向に通信環境の整備が図られ、BTの特徴が活かせる環境になっている。生産体制の整備についても、タイでの増設効果を含めて、より機能するよう進めていく。

Q7: 設備投資の補足をお願いしたい。総額2,400億円の計画に沿って進んでいるということだが、昨年度は700億円の計画に対して550億円くらいで終わっていると思う。少し少なかった分は、今年度に含まれるという解釈でよいか。今年度900億円だとすると、来年度950億円という数字になるが、その規模感で間違いはないか。分野別では、2,400億円のうち約900億円が差異化事業の計画だったと思うが、差異化の

投資が計画よりも増えることはあるか。また、定期修繕が今年度増える予想になっている点についても、補足をお願いしたい。

A7: 投資については、若干プロジェクトが後ろ倒しになったりしているものもあり、少しずれるものも出てくる可能性はある。一方で、新しい投資計画も出てきているため、現時点で 2,400 億円を下げる必要はないと考えている。分野別では、状況によっては差異化の投資が計画に比べて増えていくことも考えられる。投資について、建設費等さまざまなコストが上昇しているのは懸念材料ではあるが、収益面にあまり影響を与えないよう、どのような形で吸収できるかを同時並行的に検討している。しっかりと対応していきたい。

定修については、昨年度との比較において 35 億円増加する予想であるが、中計で織り込み済みである。隔年定修のため、やむを得ないところがある。

Q8: ポリアセタールの生産工場への出資について。9 万トンから 15 万トンにするときに、追加の資金投入はあるのか。15 万トンとなった後に、また増強プランが出てきたときには、回収はどのように考えておけばよいか。

A8: 9 万トンから 15 万トンに移るところについては、基本的に現地のジョイントベンチャーが行う。増設によるプラスの 6 万トンになるが、基本的には現地における対応で考えている。15 万トンから先は、これからまたよく検討していきたいと思うが、中国におけるマーケットの伸びについては、大変期待をしているところである。

Q9: 今年度の営業利益計画について、部門別にお伺いしたい。まず、芳香族について減益の計画だが、さらに上期・下期で見ると上期から下期に利益が落ちる背景は何か。また、機能化学品は今年度増益で上期から下期でかなり利益が増えるという計画だが、この上期・下期差も同様に確認したい。

A9: 芳香族については定修を 2 月に予定しており定修費用が下期に計上される関係上、上期から下期に利益が少なくなる形。また先ほどの説明と重複するが今年度は 2 年に一度の大型の定修。これは 2 年間でならしてみると、どちらかに偏らせた方が費用を抑えて生産量が最大化できるためこのような戦略をとっている。従って昨年度比で費用が 35 億円ほど大きく出る見込み。

機能化学品については、合成樹脂で下期好転を見込んでいる。合成樹脂はやはり原燃料、特にビスフェノール A を中心とする原料の市場動向に大きく左右され、上期はまだ高い原料の影響が残る想定。加えて、中国を中心とする子会社の再建の実行性が順次上がってくると考えており、下期型の計画。

Q10: 事業ポートフォリオ改革について。昨年度、トリメチロールプロパン (TMP) を減らすなど色々進めており、不採算事業の構造改革についてはある程度目途が立ってきたと見ているが、その理解でよいか。基盤事業の取り組みは、今回の MEP の話で大体終わりか。また、新規・次世代事業でいくつか挙げている中である程度形になりそうなものがあるのか。個人的には OXYCAPT に大変期待している。差異化事業以外の三つの事業の方向性について教えてほしい。

A10: 差異化事業、不採算事業について、しっかりと対応していくというのが今回の目玉で、TMP やホルマリンについても停止を決めた。基盤事業について、大きなものは PC だが、それ以外にも検討しているものはあり、ぜひ期待して欲しい。例えば、メタノール関連では、CO₂ 関連のところで確りと事業化を進める必要があると認識している。エネルギー関連についても同様で、カーボンニュートラルに向けた取組みをスピードアップしていき、社会に貢献できるようにしていく。同時に、収益に貢献することもしっかりと進める。

新規事業は時間がかかっているが、研究開発費、研究員などを増やしながらかみ組んでいる。例えば、固体電解質。EV 向けの電池の分野で進展しているものもある。新規の BT 材料についても期待しているところ。また、着実に伸びてきているのが抗体医薬の受託事業。採算に乗るまでに時間がかかっているが着実に伸びているので、将来的には私どもの支える柱の一つといえるよう頑張っていきたい。乳酸菌の関係でいえば、非常に効率の良い菌が見つかったりしており、期待しているところ。

Q11: メタノールの需給について。ロシア産のメタノールを含め、供給面の動向について教えて欲しい。また、需要面についても、MTO (Methanol To Olefin) を含めて整理してほしい。

A11: メタノール市況は、昨年 2021 年 4 月が 300~350ドルであったが、2022 年 4 月は 400~450ドルまで上昇した。昨年は 170 万トンのプラントが二つ、一つはアメリカ、一つはイランで稼働したが、思ったより稼働が遅かった。また、昨年度は定修があったが、定修明けの立ち上がりが欧米で遅かった。ハリケーンのトラブル問題による需給のアンバランスが起こったり、昨年 10 月に中国の石炭価格が上がったりしたこと、市況が上がっていった状況であった。今年はメタノールの新しいプラントが稼働するという話はない。一方で、需要の方は堅調であるため、需給のバランスとしては引き続きタイトで、昨年度のメタノール市況は 400ドル程度だったが、今年度は 420ドルで見ている。

ロシアについては、世界のメタノール需要 9,000 万トンのうち、ロシアで 400 万トン程度を生産している。そのうちの半分の 200 万トンがヨーロッパに輸出されていたが、ヨーロッパ側がロシア品をほとんど引き取らなくなっており、インド等に流れている。ロシア品に対する需要は減っているため、現在ほとんどが定修の前倒しという格好で止めに入っている。定修明けに、インド向けのみで供給していけるのかは不透明で、供給側としては少しタイトなバランスになると思われる。

MTO については、原油価格が昨年度 80ドル弱ぐらいのところを 100ドルで見ているが、原油価格の上昇に伴いプロピレン、エチレンといったオレフィンの価格が当然上がってくる。MTO としては、価格競争力は高くなるということであり、中国の MTO 稼働も、2-3 月は 6-7 割稼働だったが、4 月には 8-9 割で高稼働になってきている。この要因もあり、今年度の需給はタイトに推移するとみている。

Q12: 光学樹脂ポリマーについて。モバイルの複眼化、高画素化の流れと、ToF などの新しい用途の採用の状況、車載用、セキュリティーカメラなどの非モバイル用途の展開を教えてください。また、中長期的な事業の成長率はどれぐらいの目線で設定されているのか。

A12: 多眼化、高機能化はこれからも続いていく。ただ、多眼化は際限なくというわけではなく、どこかで頂点に来ることは考えられる。スマホに使われるレンズ材の機能強化、ニーズの多様化、高度化は今後も続くと考えている。また、スマホ以外の用途である車載向けや、監視カメラ向けは大きな需要が想定される。これからの話にはなるが、確実に大きなマーケットとして捉えていくべき分野と考えており、将来の拡販に向けた取り組みを進めている。車載、監視カメラは 2 桁に乗るような伸びがあるのではないかと報道、調査結果もあり、そういったことも参考にしながら伸ばしていきたい。

以上